



Title	ラブレターの笑いに関する一考察 : 『パンタグリュエル』の三つの挿話をめぐって
Author(s)	鍛治, 義弘
Citation	Gallia. 1984, 24, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10298">https://hdl.handle.net/11094/10298</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ラブレーの笑いに関する一考察

## —『パンタグリュエル』の三つの挿話をめぐって—

鍛 治 義 弘

第二次大戦後のラブレー研究（とりわけ笑いに関する研究）の中で、最も注目すべきものは、ミハイル・バフチンの『フランソワ・ラブレーの作品と中世、ルネサンスの民衆文化』であろう。ラブレー研究以外の分野での影響はさておき、この研究が従来正面から論じられることの少なかったラブレー作品の笑いに焦点を定め、笑いに一つの統一的「意味」を付与したことは、Screechのような実証主義を旨とする研究者までが笑いを扱わざるを得なくなった<sup>(1)</sup>ことからわかるように、ラブレー研究に一つの新生面を開くものであった。

しかし、バフチンの研究は、同時代的であろうと宣言しているにもかかわらず、西欧の伝統から切り離されていた故に、やはり一面に偏っていたと思われる。即ち、バフチンはラブレー作品のユマニスト的側面をあまりにも軽く考えており、この点について、論者は以前に『ガルガンチュワ』の構成との関係から論じたことがある<sup>(2)</sup>。また、彼の考え出したグロテスク・リアリズム、広場の言葉などの笑いのイメージについてみても、我々が現実のテキストに立ち向かう際には、あまりにも不十分である。ラブレーというキマイラのようなテキストを前にして、我々は強い磁力を感じながらも、それ故にこそ、常に方向を失ってしまうからだ。特に時代を経て、言語を異にする時、何が笑うべきものなのかさえも、はっきりとはつかみにくいのが実状である。したがって、我々は何が笑うべきであるのかを記述し、その笑いを、説明するとはいかなくとも、少なくとも了解可能なものにすることから、笑いに関する考察を進めて行かなければなるまい。本論文は、『第二之書パンタグリュエル』の三つの有名なエピソードを選び、これらの笑いを解明することにより、ラブレー作品の笑いの理解の端緒を開こうとする試みである<sup>(3)</sup>。

まず第一に選んだのは、エコリエ・リムザンのエピソードと言われるものである。『パンタグリュエル』第7章（章数は1542年M版による）で、パンタグリュエルはオルレアンの城門付近で一人の学生に会い、挨拶を交わした後、どこから来たのかと問うと、その学生は次の如く答える。

〈Nous transfretons la Sequane au dilucule et crepuscule, nous deambulons

par les compites et quadrivies de l'urbe; nous despumons la verbocination Latiale et, comme verisimiles amorabonds, captons la benevolence de l'omnijuge, omniforme et omnigene sexe feminin. Certaines diecules nous invisons les lupanares, et en ecstase venereique inculcons nos veretres es penitissimes recesses des pudendes de ces meretricules amicabilissimes, puis cauponizons es tabernes meritoires de la Pomme de Pin, du Castel, de la Magdaleine et de la Mulle, belles spatules vervecines perforaminées de petrosil, et si, par forte fortune, y a rareté ou penurie de pecune en nos marsupies et soyent exhaustes de metal ferruginé, pour l'escot nous dimittons nos codices et vestes opignerées, prestolans les tabellaires à venir des Penates et Lares patriotiques.)

A qouy Pantagruel dist:

《Que diable de langaige est cecy? Par Dieu, tu es quelque heretique.》<sup>(4)</sup>

このテキストを読んだだけでは、多少とも奇妙な、何かフランス語らしからぬ音によって笑えるだけであろう。Edition critiqueが指摘する通り<sup>(5)</sup>、実はこのエコリエ・リムザンの科白の前半はGeoffroy ToryのChamp fleuryのpréfaceにある一節を借り、その語順を入れかえただけのものである。

... Quat Escumeurs de Latin disent. Despumon la verbocination latiale, & transfreton la Sequane au dilucule & crepuscule, puis deabulon par les Quadriuies & Platees de Lutece, & comme verisimiles amorabundes captiuon la beniuolence de lomnigene & omniforme sexe feminin. me semble quilz ne se moucquent seulement de leurs semblables, mais de leur mesme Personne.<sup>(6)</sup>

こうして、このエコリエ・リムザンのエピソード自体が一種のパロディをなしている。ラブレーはToryがChamp fleuryで非難しているécumeur de latinの口調をまねて発展させたわけである。このエピソードのおかしさを十分感じることは、ラテン語のできるものだけであり、nous invisonsで始まるsens libreも、こうした者にのみ理解される笑いである。エコリエ・リムザンは、前置詞、接続詞などはフランス語を使いながら、ラテン語をそのまま借りてきた名詞、動詞を過剰に使った上に、アルゴをまぜ、何とも珍妙なラテン語交り文で滔々とまくしたてる。こうした過剰なlatinismeによってエコリエ・リムザンは滑稽化されているのだが、さらに次の場面を読めば、また新たな笑いを感じることができよう。

—J'entens bien, dist Pantagruel; tu es Lymosin, pour tout potaige, et tu veulx icy contrefaire le Parisian. Or vien çza, que je te donne un tour de pigne!》

Lors le print à la gorge, luy disant:

《Tu escorche le latin; par saint Jean, je te feray escorcher le renard, car je te escorcheray tout vif.》

Lors commença le pauvre Lymosin à dire:

《Vée dicou, gentilastre! Ho, saint Marsault, adjouda my! Hau hau, laissas à quau, au nom de Dious, et ne me touquas grou!》

A quoy dist Pantagruel:

《A ceste heure parle tu naturellement.》<sup>(7)</sup>

これまで気取って弁舌してきたエコリエが実はリムザン方言しか話すことができなかったとなれば、人はこの両者の間に大きなずれを感じるであろう。さらにリムザン方言が『笑劇ピエール・パトラン先生』でも使われていた一種の常套手段であり<sup>(8)</sup>, Defauxの言うように<sup>(9)</sup>, リムザン地方の人間が、洗練を知らぬ田舎者、不器用な人間の典型であることを知れば、笑いの効果は一層大きくなろう。つまり、優雅な弁論家になろうとしていたエコリエが、それに失敗するのみならず、実際はまことに田舎者であったということで、二重に価値低下させられ、我々は大いに笑うのだ。

このエコリエ・リムザンのエピソードを、滑稽な情景にすぎぬとしたPlattard<sup>(10)</sup>に続いて、V.-L. Saulnierはmachine éternelle de rireと評した<sup>(11)</sup>が、我々はここにDefauxと同様<sup>(12)</sup> 諷刺の意図を読みとる。Tetelの言うごとく<sup>(13)</sup> 諷刺の目的は、作者の目に滑稽と映るある特定の欠点を提示し、これらの欠点が馬鹿げていることを示し、これらに批判的反応を読者をしてとらせることにあろう。従って、価値引き下げをおこなう時に、視点が明らかである場合である。ここでécumeur de latinが滑稽化されていることは見てきた通りだが、さらに形式の上からも諷刺とする論拠が得られる。

Et le lascia. Mais ce luy fut un tel remord toute sa vie et tant fut alteré qu'il disoit souvent que Pantagruel le tenoit à la gorge, et après quelques années mourut de la mort Roland, ce faisant la vengeance divine et nous demonstant ce que dit le philosophe et Aule Gelle: qu'il nous convient parler selon le langaige usité et, comme disoit Octavian Auguste, qu'il fault éviter les motz espaves en pareille diligence que les patrons des navires evitent les rochers de mer.

*variante: les mots absurdes en (A, G)* <sup>(14)</sup>

ここに現われている nous は語り手と読者を含むものである。我々は以前話者としての je と読者としての vous との関係が、『ガルガンチュワ』においては特別な意味をもち、福音的思想を述べる際に現われていることを確認している<sup>(15)</sup>。『パンタグリュエル』では、この je-vous の関係は『ガルガンチュワ』ほど明白ではない。何しろ語り手の je が登場人物として現われ、パニユルジュと話をするとか<sup>(16)</sup>、パンタグリュエルの口中を探険したりする<sup>(17)</sup> ほどなのであるから。しかし、ここでの nous はいわば je-vous の分裂以前の段階であり、『ガルガンチュワ』のように je-vous の対話を通してではなく、いきなり、読者を語り手の視点に引き込んでしまっている。また古典への言及は、古典の権威を利用して、この語り手の視点を強化するものと言えよう。さらに細かな点であるが、A・G 最初の二版における absurdes の語の使用は、1542 年以前におけるこの諷刺の強さを物語っているのではないだろうか。

さてさきほど諷刺は特定の目標を持つと述べたが、このエピソードでは具体的に何が諷刺されているのか考えてみよう。これについても昔から諸説があり、Estienne Pasquier は H  lisaine de Crenne を<sup>(18)</sup>、Thuasne は Molinet を諷刺したものともしているようである<sup>(19)</sup>。結論から先に言ってしまうと、我々はこちらでもまた Defaux に与して、ソルボンヌのスコラ学者のラテン語かじりを諷したものと解する<sup>(20)</sup>。Defaux の言う論拠—このエピソードの地方大学遍歴、サン・ヴィクトールの図書目録、ガルガンチュワの手紙という連関の中における位置—に加えて、次の如きものをあげることもできるからである。『パンタグリュエル』と『ガルガンチュワ』は 1532—1534 年にひき続いて出版された二著作であり、その骨組みはまことによく似ている。『パンタグリュエル』の方が先行作品であるから、『ガルガンチュワ』は『パンタグリュエル』を練り直した作品と考えてよいだろう。その『ガルガンチュワ』は、我々が既に考察したように、非常に諷刺性の強い作品であり、形式的にもそれははっきりしていた。その『ガルガンチュワ』で、このエコリエのようなラテン語交り文を使う人と言え、何と言っても、ジャノトゥス・ド・ブラグマルド先生であり、この先生はソルボンヌの教授であった。またパンタグリュエルがエコリエを非難する言葉、h  r  tique, enchanteur, diable, diabolique は、ジャノトゥスの「異端の徒など、わしらは蠟細工同様に、わけなく捏ねあげられますわい」<sup>(21)</sup> という科白に対応しているように思われる。このような『ガルガンチュワ』と『パンタグリュエル』とのパラレリズムに従えば、エコリエ・リムザンのエピソードは,   cumeur de latin を滑稽化しながら、当時の教育全般にわたって責任を負っていたソルボンヌの神学者を諷刺していると思われる。

次に検討するのは、パニユルジュとパンタグリュエルの出会いの場面である。パリ市外を散歩していたパンタグリュエルは手傷を負い、襤褸を纏ったパニユルジュに初めて出会う。パンタグリュエルがどこから来たのかと問うたのに対して、パニユルジュが何やら訳の分らぬ言葉で延々答えるというシーンが続く。このシーンは「パトランまがいのたわご

と」<sup>(22)</sup>という科白からもわかるように、『笑劇ピエール・パトラン先生』にその直接的起源をもつと考えてよい。パトランの佯狂の場と呼ばれるシーンで、パトランはラシャ屋をごまかすために、リムザン方言を初めとして、フランスの七つの方言を口にするのである<sup>(23)</sup>。

『パンタグリュエル』のこの場面では、パニユルジュは方言の代わりに、ドイツ語を初めとする外国語を話し、さらには三つの言語をつくり上げてしまう。言葉の数は次表の如く版によって異同がみられるが、A版の9ヶ国語からだんだん増えて、結局M版では13ヶ国語になる。

	ド イ ツ	ア ン チ ポ ー ド	イ タ リ ア	ス コ ット ラ ン ド	バ ス ク	ラ ン テ ル ノ ワ	オ ラ ン ダ	イ ス パ ニ ア	デ ン マ ー ク	ヘ ブ ラ イ	ギ リ シ ア	ユ ト ピ ー	ラ テ ン
A	○	○	○				○	○		○	○	○	○
G	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○
H	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
M	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

この異同について一言しておけば、A版において話されるのは、ドイツ語を初めとする近隣の同時代語とラブレール自身が少なくとも多少は知っていたと思われるヘブライ、ギリシア、ラテンの古典語であったものが、版を重ねるにつれて、同時代語でもだんだん遠くの言葉になっていく。だんだんとフランス人にとって分かりにくい、見知らぬ言葉になっていくわけだ。アンチポード、ユトピー、ランテルノワの三つはラブレールの創造による架空語だと考えられている。

さて、こうした外国語のおかしさについて、我々自身の周囲にも例を見い出すことができるのであるから、一応は了解可能であるとも言えよう。しかし、これを説明するとなると決して容易ではない。訳の分らぬ音—それを意味というコンテキストから離れて聞く時、その解放感によって何かしらおかしいと思われる—こうした説明をGaraponならばするかもしれない。彼の言う*fantaisie verbale*とは、意味作用から解き放たれた遊びであり、つまりシーニュの無償性によって、表現のために課せられた規範に従うことから解放されるよろこびなのであるから<sup>(24)</sup>。

しかし、この説明はどうも十分でないようだ。というのもSainéanのラブレールの外国語能力に対する疑念<sup>(25)</sup>にもかかわらず、即ち誰の手になるかはおくとしても、ドイツ語を初めとする外国語はどうも所謂「意味」を表現しているようなのだ。

また、次のような説明も可能だろう。最後に話したフランス語によって、或いは状況によって既にわかっているのだとも言えるが、パニユルジュは結局飲み物、食べ物を求めて

いるにすぎないことが了解される。このごく単純な内容に対する何とも大仰な形式—このコントラストに笑いを誘われるのだ、と言うこともできよう。

またさらに、優越理論を用いても説明可能となるだろう。これを架空語の一つであるアンチボード語で説明を試みてみよう。

*《Al barildim gotfano dech min brin alabo dordin falbroth ringuam albaras.  
Nin porth zadikim almucathin milko prin al elmin enthoth dal heben ensouim;  
kuthim al dum alkatim nim broth dechoth porth min michais im endoth, pruch  
dal maisoulum hol moth dansrilrim lupaldas im voldemoth. Nin hur diavosth  
mnarbothim dal gousch palfrapin duch im scoth pruch galeth dal Chinon min  
foulchrich al conin butathen doth dal prim.》*<sup>(26)</sup>

アンチボード、ランテルノワに関しては、Emile Pons が解説しただけであるから、彼の説に従うことにする<sup>(27)</sup>。さて一読して耳なれぬ語感に気づくだろう。語尾-im, -in, -o, -th が目につく。このアンチボードは、Ponsによれば、ヘブライ語、アラビア語、ギリシア語を中心にラテン語、フランス語、英語などの語をまぜたものであり、Ponsはこれらの語尾に粗野な音を感じている。またこの文中にはFalbroth, galeth, Chinonなどの固有名詞が挿入されているが、これらはそれとみわけられないだろうか。このいかにも異様な音の中に、なじみのある固有名詞をみわけることによって、我々はこの言葉がでたらめであるという印象を持つだろう。こうした優越感が笑いを誘うということも十分言えるのではないだろうか。

我々は以上の説明で、これらの言葉が笑われる対象であり、読者が笑う主体であることを自明の理としてきた。しかし、何も笑うのは読者とは限らない。我々が笑っている蔭で笑っている別の主体を想像することもできる。それは「作者」と呼ばれる人のことである。ランテルノワを例にとってこうした事情を考えてみよう。

*《Prug frest strinst sorgdmand strochdt drhds pag brledand Gravot Chavigny  
Pomardiere rusth pkallhdracg Devintere près Nays, Bcuille kalmuch monach  
drupp delmeupplistrincq dlrnd dedelb up drent loch minc stzrinquald de vins  
ders cordelis hur jocststzampenards.》*<sup>(28)</sup>

また先程と同様Ponsの解釈に従うが<sup>(29)</sup>、今度はアンチボードのようにただ単に違う国籍の語を並べただけではない。語彙的には英・独語が中心で、むしろ先程よりなじみがあるくらいである。しかしここにはいろいろな語を擬装する方法が使われている。ただ単に語を並べるだけでなく、delmeupplistrincq (=donne-moi please-to-drink), sorgdmand

(=Sorge-demande), のように国籍の違う語を合成したり, brledand (=breland), dedelb (=doubled), drent (=trend), stzrinquald (=trinkgeld) のように子音を入れかえたり, drupp (=drop), hur (=für) のように母音を変えたりしているのである。こうして作者は語をますます神秘化していく。この神秘化に優越感が宿るのは当然考えられよう。またここでも固有名詞が使われているが、決してなじみのあるものではなく, Gravot, Chavigny, Pomardièrre, Deviniène près Nays は作者にのみごく近かしい名前である。そして、全ての言葉が明白な意味を持っているとすれば、恐らくそれを知ることのできるのは作者だけであろう。

こうして、このエピソードにおいては、単に読者が笑うのみならず、作者が自らを神秘化することによって笑っているとも思われる。

最後に、イギリスから来たトーマストとパニユルジュの間でおこなわれる身振りによる議論のエピソードに触れておこう。パンタグリユエルの並外れた知力を聞きつけたトーマストは、パリにやって来て、パンタグリユエルと論争することを望み、その方法として「言葉を発することなく、ただ単に身振りのみにて討論」することを提案した。こうして、パンタグリユエルに代わったパニユルジュとトーマストの間で、何とも珍妙な議論が続けられる。

Plattardによれば<sup>30)</sup>、この身振りによる議論のエピソードはラブレー以前にも多くの例を見い出せるようである。特に中世の法律註釈家 Accuriso の註釈書 De Origine Juris にある挿話は Budé が Annotations aux Pandectes で言及しており、『パンタグリユエル』のベーズキュとユームヴェーヌの訴訟のエピソード<sup>31)</sup>や、パンタグリユエルの諸大学めぐり<sup>32)</sup>の際に、Accursio に言及してあることからみて、ラブレーは明らかに知っていたと思われる。

『パンタグリユエル』でこのエピソードを語る19章にはM版で大きな加筆が認められ、それ以前の版の倍ほどにもなっている。M版以前の諸版では、この議論は、それ自体として笑いを誘うスカトロジーや、「豚の膀胱でも膨らますように」とか「牡鷲鳥のようにふうふう言う」などの珍妙な比喻や、パニユルジュの行う動作自体の奇妙さによって、一見しておかしさを感じることができる。

だがM版で付加された議論の冒頭の場面は少し様子が違っている。

Adoncques, tout le monde assistant et escoutant en bonne silence, L'Angloys leva hault en l'air les deux mains separement, clouant toutes les extremittez des doigtz en forme qu'on nomme en Chinonnoys cul de pouille, et frappa de l'une l'autre par les ongles quatre foys; puy les ouvrit, et ainsi à plat de l'une frappa l'autre en son strident. Une foys de rechief les joignant



comme dessus, frappa deux foyz, et quatre foyz de rechief les ouvrant; puyz les remist jointes et extendues l'une jouxte l'autre, comme semblant devotement Dieu prier.

Panurge soubdain leva en l'air la main dextre, puyz d'ycelle mist le poulse dedans la narine d'ycelluy cousté, tenant les quatre doigtz estenduz et serrez par leur ordre en ligne parallele à la pene du nez, fermant l'œil gauche entierement et guaignant du dextre avecques profonde depression de la sourcile et paulpiere; puyz la gausche leva hault, avecques fort serrement et extension des quatre doigtz et elevation du poulse, et la tenoyt en ligne directement correspondente à l'assiete de la dextre, avecques distance entre les deux d'une coudée et demye. Cela faict, en pareille forme baissa contre terre l'une et l'autre main; finalement les tint on mylieu, comme visant droict au nez de l'Angloys.

《Et si Mercure...》 dist l'Angloys.

...

Les theologiens, mediciens et chirurgiens penserent que par ce signe il inferoyt l'Angloys estre ladre.

Les conseilliers, legistes et decretistes pensoient que ce faisaint, il vouloyt conclure quelque espece de felicité humaine consister en estat de ladrye, comme jadys maintenoyt le Seigneur.<sup>(33)</sup>

この部分では、一読しただけでは、どのあたりがおかしいのかと思われよう。パニユルジュやトーマストの動作を記述する文体は、まじめなようにも思われる。このエピソードのおかしさは、結局のところは、賢い者がだまされることと、取り違えにある<sup>(34)</sup>と思われるが、この加筆された部分がなければ、このおかしさは十分成功しなかっただろう。というのも、こうした笑いが成立するためには、議論をしている両者の差が強調されねばならないからだ。この冒頭のシーンではトーマストの動作は「恭々しく祈念するかのように」という比喻からもわかる通り、まじめに描かれている。これに対するパニユルジュの動作も同じように描かれているようにもみえるが、今度は少し勝手が違う。というのもPlattardの指摘によれば<sup>(35)</sup>、このパニユルジュの行う動作は嘲弄の仕草に他ならないのであるから。この嘲弄の仕草を言葉を選び、数字をも含めて精確綿密に描いていくことで、文体と行動の意味とのコントラストが生まれ、トーマストは「もしメルクウリウスが」という科白からもわかる通り取り違えてしまうのである。残念ながらトーマストの身振りが何を意味するのか現在のところは明らかにされていない。恐らくは、当時の議論方式を借りたか、まねたものであろう。ともかくトーマストは何らかの厳密な体系によって行動している。一

方パニユルジュは日常的な身振りの体系によって行動している。その日常的な身振りの意味をトーマストは自らの従っているコードによって解読したと思われ、その思い違いを読者が見通すことができるが故に一つの笑いが生まれるのである。

またM版では法律家などの解釈が付されている。一つの謎に対する二つの解釈という構図は、M. Butorの言う通り<sup>36)</sup>、ラブレーの作品にはよくみられることである。しかし、この解釈は、『ガルガンチュワ』におけるテレームの僧院の碑文のジャンとガルガンチュワの解釈<sup>37)</sup>と同様で、決して意味を明らかにするものではなく、逆にさらに一層意味を隠し多様化するように働いている。この場合も同様で、パニユルジュの動作を解釈者はそれぞれのコードで解釈することで、一層ずれを拡大し、笑いを増大させている。

以上のように、M版の付加部分は、このエピソードの笑いの基本構造である取り違えを強調するように書かれている。

この三つのエピソードをみた結果を簡単にまとめておこう。まずこれら三つのエピソードにはいずれも前例が存在した。つまり『パンタグリュエル』では笑いの基本的構造においてはラブレーの独創性はまだ見られない。勿論ラブレーの新しさがまったくないわけではないが、まだ量的拡大、新しいニュアンスの付加の段階にとどまっている。次にラブレーの笑いは徹頭徹尾言葉による言葉の笑いである。これはモリエールに代表される状況による性格喜劇というものとは著しく異なっている。というのもラブレーは典型を作ることとはあっても、性格を作ることはないのだから。さらにこの言葉は、バフチンの言うような広場の卑語だけではありえない。ラブレーの言葉は必ずしも誰でもが理解可能というわけではない。だからラブレーの笑いにはいろいろな段階を想定することができる。スカトロロジーや *sens libre*、聖書のもじりといった広範囲の人々が笑うものの他に出典を知っていたり、ラテン語や外国語を知っていたりしないと十分味わえないものも存在する。

以上みてきたようなことはラブレーの笑いのほんの一部分にすぎない。身振りの議論のエピソードに既に見られるように、ラブレーの作品の展開とともに、言葉と意味の対応のずれを拡大するようにもみえ、また笑いの主体も変化するようにもみえるが、こうした問題は今後の課題としたい。

## 註

- (1) これまで宗教思想を中心にラブレーを論じてきた Screech が近著, *Rabelais*, Cornell U. P., 1979, においては、かなりの部分を笑いに割いているのは、その証左だと思われる。

- (2) 拙稿, 「プロパガンダのストラテジー—ガルガンチュワの変貌と構成について—」,

『GALLIA』, XXI—XXII, pp.75—84.

(3)これら三つのエピソードは、まとまりがあり、ラブレー的であると論者に思われるものを選んだのであって、ラブレーの笑い全体を論ずる意図は本論にはない。

(4)*Pantagruel, Oeuvres de François Rabelais*, édition critique publiée par Abel LEFRANC et alt., Tome troisième et quatrième, Champion, 1922, pp.62—64。以下 *Pantagruel* からの引用は全て同書により、*Pantagruel* と表示する。

(5)*Pantagruel*, p.71, note. 145.

(6)Geoffroy TORY, *Champ fleury*, in Peter RICKARD, *La langue française au seizième siècle, Etude suivie de textes*, Cambridge U.P., 1968, p.85.

(7)*Pantagruel*, p.69.

(8)cf. *Maistre Pierre Pathelin*, in *Jeu et sapience du moyen âge*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), ©1951, p.316.

(9)G. DEFAUX, *Pantagruel et les sophistes*, Martinus Nijhoff, 1973, p.84.

(10)J. PLATTARD, *L'œuvre de Rabelais*, Champion, 1967, p.60.

(11)V.—L. SAULNIER, 《Rabelais devant l'écolier limousin》, in *Mercure de France*, 1—X—1948, p.275.

(12)G. DEFAUX, *op. cit.*, pp.86—90.

(13)M. TETEL, *Etude sur le comique de Rabelais*, Olschi, 1964, p.13.

(14)*Pantagruel*, pp.70—71.

(15)拙稿, 前掲書, p.81.

(16)*Pantagruel*, pp.197—206.

(17)*Pantagruel*, pp.329—336.

(18)cf. J. PLATTARD, *op. cit.*, pp.56—57.

(19)L. THUASNE, *Etudes sur Rabelais*, Champion, 1969, p.339.

(20)G. DEFAUX, *op. cit.*, pp.86—87.

(21)*Gargantua, Oeuvres de François Rabelais*, édition critique publiée par Abel LEFRANC et alt., Tome premier et second, ©1912, pp.173—174。  
*Gargantua* への言及は同書により以下 *Gargantua* と略記する。

(22)*Pantagruel*, p.117.

(23)cf. *Maistre Pierre Pathelin*, *op. cit.*, p.315sq.

(24)R. GARAPON, *La fantaisie verbale et le comique dans le théâtre français du moyen âge à la fin du XVII<sup>e</sup> siècle*, Armand Colin, 1957, p.12.

(25)L. SAINÉAN, 《Le vocabulaire de Rabelais》, in *Revue des études rabelaisiennes*, Tome VI, 1908, p.316.

(26)*Pantagruel*, p.113.

- (27) E. PONS, «Les jargons de Panurge dans Rabelais», in *Revue de littérature comparée*, 1931, pp.200—216.
- (28) *Pantagruel*, p.116.
- (29) E. PONS, *op. cit.*, pp.190—200.
- (30) J. PLATTARD, *op. cit.*, p.71.
- (31) *Pantagruel*, p.128.
- (32) *Pantagruel*, p.59.
- (33) *Pantagruel*, pp.218—220.
- (34) *Pantagruel*, p.228, note 21 並びに J. PLATTARD, *op. cit.*, pp.70—72.
- (35) J. PLATTARD, *op. cit.*, p.73.
- (36) M. BUTOR, *Répertoire*, IV, E. de Minuit, 1974, pp.125—133.
- (37) cf. *Gargantua*, pp.438—441.